

戦争に翻弄された児童

福岡県久留米市の市立大善寺小学校に、終戦の年の学校日誌が残っていた。元日から大みそかまで一日も欠かさず、出征軍人を見送る姿や、終戦直後に進駐軍の歓迎会を開いたりしたことなど、日々の出来事を書いて

いる。事実を淡々と記した文章から戦争に翻弄された学校や子供たちの様子が伝わり、専門家も「貴重な資料」と評価している。

【柴山雄太、写真も】

戦後70年

日誌は前身の三瀬郡大善寺国民学校時代のもの。B5判のわら半紙に、1945年1月1日から12月31日までの出来事が、1日1ページずつ記されている。昨年11月、校長室の書棚を整理していた市川

出征軍人見送り 進駐軍歓迎会

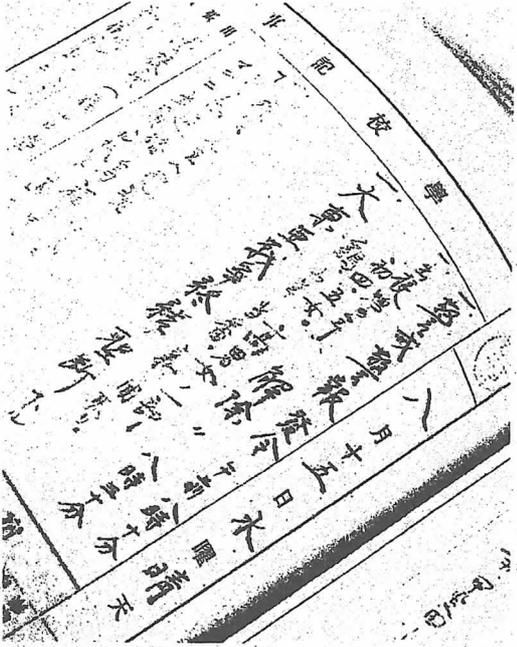
昌庸校長が偶然、棚の奥から他の資料と一緒に見つけた。大善寺国民学校初等科6年生だ

「引き継ぎもなく誰も存在を知らなかった」と市川校長。他の年の日誌が見つかった

「引き継ぎもなく誰も存在を知らなかった」と市川校長。他の年の日誌が見つかった

3月12日の日誌によると、米軍のB29爆撃機

久留米市立大善寺小学校



大善寺小学校に残されていた学校日誌。8月15日のページには「大東亜戦争終結ノ聖断下ル」と終戦を記している。福岡県久留米市六ツ門町で

終戦の年 365日の学校日誌残る

童だけが登校していた。このため学校は天皇陛下の終戦の詔を改めて伝えなければならず、児童を翌日午後2時に臨時登校させて終戦の詔を読み聞かせた後、校長が戦争終結を伝えた。

内田繁美さん(82)は「そういえば、臨時登校はうっすらと覚えて

よほどでなければ靴下を履かず、素足に靴を履いていました。内田さんによると、戦時中は学校施設が兵舎として使われたため、児童は廊下を教室代わりにして勉強した。

終戦後、世の中が戦前と180度変わったことを象徴する記述がある。11月8日、学校で進駐軍歓迎会が開かれ、12月24日の終業式の日には婦人参政権など戦後の選挙制度改革

に伴う「選挙に関する講演会」が催された。日本近代教育史に詳しい立教大の前田一男教授は「戦時中の学校

日誌は、学校関係者がGHQに戦争責任を問われることを恐れ、多くが廃棄された。この日誌は終戦の年の1年分すべてが残っており、当時の学校の様子を連続して見ることができる。8月15日を挟んだ教育現場の劇的な変化が分かる貴重な資料」と話す。